

Joan G. Robinson, When Marnie Was There: (Re-) Encounter or Reconciliation with the Past

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): Joan G. Robinson, When Marnie Was There, Norfolk, the Broads, continuity with the past 作成者: 安藤, 聡 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/511

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ジョウン・G・ロビンソン『思い出のマーニー』 一過去との邂逅あるいは和解

安藤 聡

ジョウン・G・ロビンソン (1910～88) は幼い読者向けの挿話集『テディ・ロビンソン』シリーズ (邦題『くまのテディ・ロビンソン』) や『メアリー・メアリー物語』シリーズ (邦題『すえっ子メリーメリー』) などで知られる。ロンドンの郊外に近いバッキンガムシャー州の小さな町ジェラード・クロスで生まれ育ち、チェルシーの美術学校に学んだ彼女は、30代初頭で画家、イラストレーターとして活動を開始し、イーニッド・ブライトン、ドロシー・アン・ロヴェル、ジェニファー・フォードといった作家の作品のための挿絵を描き、旧姓のジョウン・ゲイル・トマス名義でキリスト教的な詩集も数冊出版している。その中であって、『思い出のマーニー』⁽¹⁾ (1967) は他の作品よりも年長の少年少女を対象とした本格的な長編小説であり、異色作であると言える。この作品ではロビンソンは物語作家に徹していて、挿絵は『くまのパディントン』の挿絵でお馴染みの、ロビンソンの友人でもあるペギー・フォートナム (1919～) が担当している。

『思い出のマーニー』はノーフォーク州の海辺の小村を舞台とし、その地の風土に深く根ざした物語が展開する。この地方は海拔が低く、平坦な湿地帯が広がっていて、干拓のための風車が今も散見され、18世紀には独自の農業技術による農業改革が行なわれた。19世紀前半にはジョン・クロウム、ジェイムズ・スターク、ジョウゼフ・スタナードなど、この地方の中心都市ノリッジに生まれ育った画家たちが、川や風車を含む田園風景を多く描き、「ノリッジ派」と呼ばれるに至った。ロビンソンの作品でも、湿地帯と風車が物語の重要な舞台となっている。ひとりの孤独な少女が、孤独を自覚することもないままにこの地に送られ、過去と巡り会うことによって自己の内面を修復するこの小説は、出版直後の時点で「卓越した、忘れ得ぬ美しい物語」と評されている⁽²⁾。



ジョン・クロウム《月の出》

1. アンナとマーニーの邂逅

物語は主人公アンナが親代わりのプレストン夫人に見送られてロンドンのリヴァプール・ストリート駅から列車でノーフォークに向けて旅立つ場面から始まる。アンナは小児喘息に加えて精神的な問題を抱え、療養のために夏休みを待たずにプレストン夫人の古い友人であるペグ夫人の許に預けられることになった。アンナの「問題」とは、学校でも近隣でも人間関係の輪の中に入ろうとせず、その輪を「ある種の目に見えない魔法の輪」(10)

と認識し、自分をその輪と無関係な存在と見なしているということである。アンナ自身は、自分に友達が一人もいないことを別に問題だとは思っていないが、担任のデイヴィソン先生は彼女が「やってみようもしないこと」を問題視していて、アンナはこのことをあまりに頻繁に指摘されるので、「やってみようもしないこと」(not-even-trying)を「ひとつの長い単語」だと思い込んでいた(10)。アンナが「普通の表情」('ordinary' look)をしているとプレストン夫人はそれを「無表情な顔」(wooden face)と内心で心配する(8)。

アンナはペグ夫妻に歓迎され、夫妻の家に入った瞬間に「暖かい、心地よい、古めかしい匂い」を感じる(17)。第二章で花が咲き誇る小さな庭をミツバチが飛び交う羽音の描写が二度繰り返されている(16、21)が、この描写がこの家の素朴な居心地の良さをよりいっそう強調していると解釈できよう。ミツバチの羽音は、日本ではあまり意識されることがないが、英国では長閑な夏の日(この場合は初夏)の象徴のひとつである。無事に到着した旨をプレストン夫人に知らせるべく手紙を認めていたアンナは、自分がプレストン夫人のことを好きだったことに初めて気付く。

アンナはこの地で自由を満喫しつつも、自分が厄介払いされてここに送られたという気分を拭い切れない。河口の入江(creek)に面した沼地の古い屋敷の窓から、誰かが自分を見つめているような気がした彼女が、その屋敷についてペグ夫人に訪ねると、そこは長年空き家のはずだと夫人は答える。アンナは毎日この屋敷の周囲を歩き回り、また偏屈者の年老いた漁師ワンターメニーの舟に乗せてもらい海岸まで行くようになるが、ある夕暮れにボートから見ると、屋敷の二階の窓にアンナと同年齢くらいの少女の姿が見える。

ある夕暮れ、ペグ夫妻が出かけた後で、アンナがひとり夕食を済ませて満潮の入江の船着場に散歩に行くと、新品の小舟が「まるでアンナを待っていたかのように」(62)そこに浮かんでいた。彼女は乗り込み、慣れない手つきで漕いで行くと、屋敷の前で一人の少女が待っていて、アンナを岸に引き上げる。少女は以前からアンナと友達になりたくて、ずっと彼女のことは見ていた、と言う。アンナは毎日満潮の時間に入江に行き、船で少女に会いに行くようになり、マーニーと名乗るこの少女のことを少しずつ知るようになる。満潮が夜中の日には、アンナはパジャマのまま寝室から抜け出して行く。

『アリス』や『ピーター・パン』あるいは『ナルニア』の例を挙げるまでもなく、英国の優れたファンタジーには、親や保護者の不在時に冒険が始まるものが多い。このような設定には、特に英国の上層中産階級(つまり児童文学の作者、読者双方の多くが属していた階級)では伝統的に母親が子育てにあまり深く関与せず、子供を乳母(英語で言う nurse / nunny)の手に委ねることが多かったという背景の他に、当然のことながらファンタジーをめぐる「秘密」を主人公(たいていは子供)と読者だけが共有するためという必然性がある。『思い出のマーニー』においては、両親(しかも父親は継父)を事故で失ったアンナが、親代わりのプレストン夫妻の許を離れ、さらに一時的な保護者代わりのペグ夫妻が留守という、三重の意味で保護者が不在の時に、彼女とマーニーだけに共有される秘密の冒険が

始まっているのである。

その後アンナは数日間を、マーニーと会えないままに過ごし、屋敷にも人の気配が感じられない。だがそれからマーニーは、思いがけず昼間に浜辺や砂丘に現われ、二人はまた毎日会うようになる。アンナとマーニーは互いを羨ましく思うが、やがてマーニーが気まぐれに現われない(とアンナには思われる)日々が続き、アンナは苛立ちを禁じ得ない。マーニーが何故か風車を恐れていることを知ったアンナは、ある日ひとりで風車小屋の中に入って行くと、梯子の上でマーニーが泣いているのに気付く。アンナはすぐに助けに行くが、二人とも降りられなくなり、泣き疲れて眠り込んでしまい、気付くとマーニーはアンナを残して、迎えに来た従兄のエドワードと帰って行く。ひとりでどうにか下に降りたアンナは、帰り道で倒れているところを通りすがりの人に救助されてペグ家に帰るが、風邪をこじらせて二週間ほど寝て過ごすことになる。

自分を残して帰って行ったマーニーに腹を立てていたアンナは、回復して屋敷の前を通りかかったとき、マーニーが窓から自分を呼んでいるのに気づく。彼女は屋敷から出られないと訴え、遠くに送られることになったのでアンナに別れを告げなければならない、と言う。満ち潮に足を取られたアンナが一瞬目を逸らした際に、屋敷の窓からマーニーの姿は消えていた。失意のままに水の中を歩いていたアンナは水位の上昇にも気付かず、やがて溺死の恐怖と孤独に苛まれ、倒れかけたところを小舟で通りすぎたワンターメニーに助けられる。再び長い時間を病床で過ごすことになった彼女は、見舞いに駆け付けたプレストン夫人にロンドンに帰るかここにいるかを問われ、この地に残りたいという意思を示す。再び回復したアンナの身長が以前よりも目に見えて伸びたことが明言されている(172)が、このことが彼女の外面、内面双方における急速な成長を明示していることは指摘するまでもない。のちの第32章でも、久しぶりにアンナに会ったプレストン夫人が、アンナの身長が急速に伸びたことに驚いている(241)。

やがて、沼地の屋敷は両親と三男二女からなるリンゼイ家が別荘として購入し、ある日アンナは砂丘でこの兄弟姉妹と出会うことになる——実は彼女は第三章の冒頭で、おそらくは屋敷の下見に来たこの家族を見かけているが。孤独癖と空想癖のある次女プリシラは、屋敷の中でマーニーの古い日記を発見し、この地に来て以来ときおり姿を見かけるアンナをそのマーニーの幻影だと思っていた。アンナとプリシラは日記を熟読し、プリシラの母リンゼイ夫人や他の兄弟たちも巻き込んで日記を解読し、その日記が第一次世界大戦の頃に書かれたものであり、ときおり日記に登場する奇妙な少年というのが子供の頃のワンターメニーであることが判明する。

多くの英国ファンタジーにおいて、保護者の不在が非現実的な冒険の成立の前提条件となることにはすでに触れた。だが一方で、主人公の子供らにとって保護者としての大人は、物理的精神的な自由や非現実的冒険の障害であると同時に、「過去との連続性」を提供する存在でもあるという点も見落としてはならない。この後、リンゼイ夫人の友人であるペネ

ロピー・ギル（通称ギリー）という、さらに年長の大人が登場することによって、過去とのよりいっそう強い結びつきが提供され、マーニーをめぐる謎の解明は急展開を迎えることになる。

アンナとリンゼイ一家はひとつの秘密を共有することで絆を強め、アンナはここで家族愛を疑似体験する。同じ頃、プレストン夫人がロンドンから訪ねて来て、リンゼイ家にも歓迎され、その帰り道で初めてアンナと心を通い合わせることが出来た。同じ日の夕刻にリンゼイ家に到着したギリーは、アンナを自分の孫のように扱い、かつてこの沼地の屋敷に住んでいた友達マリアン（通称マーニー）のことを皆に話す。海軍にいたマーニーの父が溺死したことやマーニーが乳母に虐待されていたこと、また彼女が行方不明になり風車小屋でエドワードという所を発見されその直後に寄宿学校に入れられたことなどを、ギリーは順を追って述懐する。マーニーはのちにエドワードと結婚するが、娘が生まれてすぐに彼は戦死し、マーニーと娘のエズミーの親子関係は上手く行かず、家出したエズミーはすぐに結婚して女兒を産んで（マリアンナと命名）すぐに離婚、その後再婚した直後に夫婦揃って事故死したという。マーニーは自分の孫に当たるマリアンナを引き取って沼地の屋敷で育てたが、心労のためもあって数年後に病死してしまった。

ここまでを聞いたリンゼイ夫人はこの物語の全貌を理解し、ギリーの話を引き継いでアンナにそこから現在までの部分を説明する。すなわち、孤児院に送られたマリアンナは、二、三年後にある夫婦に引き取られて行った。その夫婦はマリアンナを自分の娘として育てたかったので、彼女の名前を変えようとしたが、完全に変えたのではなく後半だけを取ってアンナと呼ぶことにした。このときに夫妻が彼女の名前の中に過去との連続性を残したことは賢明だったと言えよう。プレストン夫人はアンナがこの屋敷に住んでいたことを知っていたが、それを自分からではなくリンゼイ夫人からアンナに伝えることを望んだという。

アンナが沼地の屋敷にマーニー（つまり祖母）と住んでいたことを覚えていなかった理由は、その頃まだ幼かったということも無論あるが、その後でまったく異なった環境に身を置くことになり、過去から完全に切り離されたからであるとも考えられよう。だがその記憶は彼女の内面から消え去ったわけではなく、過去とのつながりを失った状態で生活するという苦しみに埋もれていただけなのである。実際に彼女は、祖母と暮らしていたという事実だけは漠然と記憶していて（122）、また初めて沼地の屋敷を見たときには、そのわけも分からぬままに「これこそが、自分が長年探し求めていたものだ」という確信を持っている（25）。この場面に至るまで彼女は、無意識に過去との連続性の回復を探求していたことがこの叙述から明らかになる。彼女もまた、多くの優れた時間ファンタジーの主人公たちと同様、過去との連続性を回復することで内面を修復していると言えるのである。

2. アンナを癒すものたち

このように過去から切り離されたアンナは自分の在り方に確信が持てず、それ故に他者を信じることも出来ず、他者から与えられているはずの愛情を実感することも出来なくなっていた。彼女は母親が自分を置いて休暇に出かけたこと、その果てに旅行先で事故死したことを恨んでいて、自分を残して死んだ祖母をも憎んでいる(123)。すでに言及したように、アンナはプレストン夫人の許を遠く離れて初めて、夫人のことが好きだったと実感している。プレストン夫妻もまた、これもすでに触れたとおり、アンナを実の娘として育てたいという意思を持っている。だが夫妻は、アンナを育てる手当てとしていくらかの援助金を月々受け取っていて、その事実をアンナに対して隠していたため、このことを偶然知ってしまったアンナは、夫妻に対して不信感を募らせる。ノーフォークに送られたアンナが、自分は厄介払いされてここに来たと感じて、海鳥の鳴き声が「ピティー・ミー」('Pity me' すなわち「私に同情して」の意)と聞こえる(25、52、63、68他)こと背景には、このような経緯があった。

アンナとプレストン夫人は、第32章に至って初めて心が通い合っている(240以下)が、この二人は互いを気遣いすぎて却って互いの誤解を招くような関係であった。アンナは他者との関係を避けるために、他者との対立をも極力回避すべく、自分の意見を主張することもない。マーニーと二人でいるときでさえ、アンナは相手と異なる自分の見解を述べることを敢えて差し控えている(例えば104)。

第16章でアンナはマーニーに、自分の両親が死んだこと、一時的に祖母に育てられていたこと、祖母が死んだ後で施設に送られ、やがてプレストン夫妻に引き取られたこと、夫妻が自分を育てることに對して手当金を受け取っていることなどを話している。アンナは、夫妻が送金を受けていることを自分に隠さないでいて欲しいと思い、夫人がそのことを自分に話せるよう促したが、夫人は隠し続けたという。マーニーはアンナを慰め、「誰よりもアンナを愛している」と言う。これによってアンナは、「まるで心の中から重荷が取り除かれたかのように」「空気のように軽やかな気分」を実感している(126)。マーニーはアンナにとって、初めて同じ「輪」の中に入ることが出来た相手なのである。

マーニーとの出逢いはこのように、アンナの内面の修復に大きく関与しているが、アンナに与えられた癒しはそればかりでは無論ない。例えばフランシス・F・バーネットの『秘密の花園』で、メアリーやコリンがヨークシャーの大丘陵地帯の自然環境によって癒されているように、『思い出のマーニー』においてもノーフォークの湖沼地帯(the Broads)の風土がアンナの心身の回復に多大に影響している。小児喘息を患っているアンナには、ロンドンの大気は不浄過ぎたであろうし、都市の雑踏は必ずしも彼女の精神にとって理想的な環境ではなかった。ペグ家への到着を知らせる手紙を投函に行ったアンナは、村の外れの入江にひとり佇み、その日の朝リヴァプール・ストリート駅を発ったことが「百年も前の出来事のように思われた」(24)。ここは村の「すぐ近くなのに別世界のような」場所で、「小

舟と鳥と水と、広大な空が果てしなく続くだけの、遠くはなれた静かな世界」であり (23)、その「巨大で閑静な空虚さが、アンナの内面の小さな空虚さと調和しているように思えた」(25) のである。このような別世界を、いつでも行くことができる場所に持つことは、彼女にとって内省の場という意味からもきわめて重要であり、またそれはマーニーと出逢うための大切な伏線でもあった。

アンナはまた、ペグ家の居心地の良さや、彼女を心をこめて歓迎するペグ夫妻によっても、日常的に少しずつ慰められている。第五章の冒頭で彼女は、このリトル・オウヴァートンの村には「暖かく居心地の良いペグ家」と「屋敷のいくつもの窓が自分を見守っている入江」と「大きなカモメが頭上を飛び交い、砂丘にウサギの巣穴もある浜辺」という三つの世界があることを自覚し、その三つを自由に往来する日々を楽しんでいる (37)。彼女はペグ夫人の友人スタッブズ夫人の娘サンドラとは仲良くなれないが、ペグ夫人はサンドラの言い分だけを聞いてアンナを批判するスタッブズ夫人に対して聞く耳を持たず、アンナを「私たちにとっては黄金のように良い子だ」(as good as gold with us, 45) と断言する。夫人のこの言葉を、丁度そのとき帰宅したアンナは物陰で聞いている。この後の場面でアンナは、夫人のこの言葉に特に胸を打たれたわけでもなく (少なくとも語り手はそのことに言及しない)、自分が原因で夫人が友人と気まずくなることに対して心苦しさを感ずるばかりだが、このようにアンナを全面的に肯定して受け入れる夫人の態度は、アンナにとって重要な意味を持っていたはずである。もちろん彼女が自分に対して与えられている愛情を実感できるようになるまでには、もう少し時間がかかるが。このような日常の小さな出来事のひとつひとつが積み重なって、アンナの内面の回復が進んでいるということは想像に難くない。

とは言え、第5章の冒頭で語り手が明言しているように、リトル・オウヴァートンの「三つの世界」の中でアンナにとって最も重要なのは、屋敷が見える入江の世界である (38)。このことが示すように、アンナに与えられたさまざまな慰め、癒しのうち、最も重要なのがマーニーとの出逢いであったことは言うまでもない。

3. 過去との連続性

英国の児童文学 (特にファンタジー) に詳しい読者なら、おそらく『思い出のマーニー』とルーシー・M・ボストンの『グリーン・ノウの子供たち』(1954)、あるいはフィリップ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』(1958) との共通点に気づくであろう。いずれの作品も、イングランド東部の沼沢地を舞台にして、何らかの形で過去から切り離され居場所を失ったひとりの子供が、この地の古い屋敷で過去と触れ合うこと (より具体的に言えば、過去にその場所に存在した子供と出逢うこと) を通して、自分の居場所を (再) 発見して内面の修復を成し遂げる、という物語である。『グリーン・ノウの子供たち』はケインブリッジシャー州 (の、かつてはハンティンドンシャー州だった地域) の沼沢地の古いマナーハウ

スを舞台として、母親の死と父親の再婚、海外赴任によって居場所を失った7歳のトリーが、17世紀中葉にその屋敷に住んでいた三人の子供トウビー、アレグザンダー、リネットと出逢う物語である。『トムは真夜中の庭で』では、弟の病気のためにケインブリッジ近郊の居心地の悪い親戚宅に預けられた思春期前の少年トムが、叔父と叔母が住むフラットが田舎屋敷だった頃にそこにいた少女ハティと、かつてそこにあった庭園で時を越えて巡り会ふ。

ハンフリー・カーペンターは、1950年代のファンタジーに共通する特質として、過去の再発見を主題とし、ひとりかふたりの子供が自分の家族、あるいは滞在している家をめぐる歴史、神話を偶然知り、非日常的な冒険に巻き込まれ危険を経験し、その結果として精神的、知的成長を遂げる、というプロットを指摘している⁽³⁾。さらに言えば、これらの作品は、何らかの事情で居場所を喪失した孤独な子供が、一時的に滞在している場所（たいていは古い屋敷）で「過去との邂逅」を経験し、それによって孤独が癒され、自分の居場所を（再）発見するに至る、というモチーフが共通している⁽⁴⁾。「過去との邂逅」をやや広い意味に解釈すれば、メアリー・ノートンの『床下の小人たち』（1952）もこの類型に当てはまる作品であり、C・S・ルイスの『ナルニア国物語』の第一巻『ライオンと魔女』（1950）もまた、子供の人数が少しばかり多い点を除けば、この類型にほぼ当てはまる作品である。

いずれの作品でも、古い屋敷であるということや、その周辺の田園という環境が、物語の成立にきわめて重要な意味を持っている。このようなタイプのファンタジーは、さらにアリソン・アトリーの『時の旅人』（1939）まで遡ることが出来よう。この作品はダービーシャーの丘陵地帯が舞台となるが、この地の風土やそこで実際に起こった歴史上の事件（スコットランド女王メアリーの逃亡とアンソニー・バビントンによるエリザベス女王暗殺計画）が物語中で大きな位置を占める。これらの作品と比較すると、『思い出のマーニー』が20世紀の英国ファンタジーのひとつの伝統を継承する作品であることが明確になろう。

アンナもまた、トリーやトム、あるいは『時の旅人』のペネロピーと同様、過去との邂逅を通して自己に対する確信を取り戻し、自分の居場所を発見するに至っている。アンナにとって沼地の屋敷に祖母と住んでいたときの記憶は、連続性を絶たれた遠い失われた過去であった。マーニーと出逢ったことで、アンナは自分の過去との邂逅を果たしているのだが、もちろんその時点で彼女はマーニーが自分の過去に関係するという事実には気付いていない。この時の彼女は、ただ「突然、ひどく幸福な気分になった」だけである（68）。彼女がマーニーを自分の過去として認識するには、そしてその認識を通して過去との連続性を回復するには、プリシラと出逢い、リンゼイ家の全員と出逢い、さらにギリーと出逢う必要があった。また逆に、アンナは過去としてのマーニーを通してリンゼイ家の人々やギリー、すなわち彼女が心を開くことが出来る「現在の」人々と出逢っているとも言えよう。同様な意味で、彼女はマーニーを通して、プレストン夫人とも「再び出逢う」ことが可能になったのである。

第30章の末尾近くで、アンナは夏休みの終わりが近づいていることを認識している(230)。彼女は学校に戻らなければならないし、リンゼイ一家も別荘である沼地の屋敷から都会の自宅に帰らなければならない。この地で彼女が発見した「居場所」すなわちペグ家や砂浜、それに沼地の屋敷などはすべて、一時的な居場所に過ぎなかった。第30章末尾でアンナは、リンゼイ一家をプレストン夫人に紹介することを決心しているが、それはこの両者が友人同士になれば、自分の「ふたつの世界がひとつになる」と考えたからである(230～231)。アンナはこの場面に至って、自分の本当の居場所がロンドンのプレストン夫妻宅であることに、確かに気付いているに違いない。

4. 結論

『思い出のマーニー』の原題は *When Marnie Was There*、すなわち『マーニーがいた頃』である。この原題が暗示するとおり、マーニーがそこにいたのは過去のことであり、アンナは今後マーニーに再び会うことはない。アンナとマーニーは、それぞれの痛みを内面に隠し持ち、意識的にであれ無意識的にであれ、慰めを必要としていた。出逢った頃ふたりは互いを羨んでいたが、アンナと同様にマーニーもまた、父親の事故死や乳母からの虐待など、幸福とは程遠い境遇にあった。『トムは真夜中の庭で』において、トムとハティそれぞれの孤独が共鳴し合い、ふたりが時を越えて巡り会っているように、アンナとマーニーもその成長過程において、それぞれの痛みを克服するために出逢わなければならなかったと言えよう。マーニーと一緒に時間を過ごしているときにアンナは、マーニーが自分の祖母の少女時代だとは知る由もなかったし、同じようにマーニーも、アンナが将来の自分の孫だとは気付きもしなかった。アンナはこの地に、心身の療養のために夏休みを前倒しして一時的に滞在していただけであり、マーニーもまた過去の世界で夏の一時期を乳母や従兄らとともに入江の別荘で過ごしていたに過ぎない。少女時代のマーニーと少女時代のアンナは、初めから限定されたひと夏の短い時間の中でのみ、出逢うべくして出逢ったのである。

アンナは過去との連続性を断絶され、それゆえに必ずしも自覚はしていなかったものの孤独な状態に身を置くことを余儀なくされていた。だが一方で彼女は、自分を「置き去りにした」母親や祖母を許せないという感情から、過去を拒絶し自ら過去とのつながりを断ち切っていたとも考えられる。このような意味では、彼女は自分の過去と和解するために、マーニーすなわち少女時代の祖母と出逢う必要があった。マーニーに慰められ、内面を修復する過程で同時に、彼女もまたマーニーの痛みを和らげ、癒しを与えていたのであった。さらに言えば、アンナは結果的に、偏屈者のワンターメニーの孤独をも慰めている。11人兄弟の末子として、生まれた瞬間から家族に歓迎されず「一人余計」(One too many→Wuntermenny)と名づけられた彼は、孤独な少年がそのまま年老いたような、「アンナがこれまでに知っているうちで、最も淋しい人」(276)だが、最終章で別れ際にアンナ

に、ごくわずかにではあるが心を開いていることが暗示されている (275)。この人物はアンナにとって、命の恩人であると同時に、ギリと並んで数少ない「マーニーがいた頃」を知る、過去との直接的なつながりを体現する存在なのである。アンナが彼を多少なりとも慰め、その心を開かせることができたのは、彼女自身が過去との和解を果たし、過去とのつながりを取り戻すことによって、孤独に苛まれ続けた内面を修復し、他者から与えられた愛を受け止められるようになったゆえに、他者にも愛を与えることが可能になったからであろう。第32章の、プレストン夫人と初めて心が通い合う場面で、アンナは突然「長年の憎しみが消え去って」いて、いつの間にか「母と祖母を完全に許していた」ことに気付いている (241)。しかも彼女のこの認識は、マーニーの正体を知る前のことである。

『グリーン・ノウの子供たち』や『トムは真夜中の庭で』と同様『思い出のマーニー』でも、屋敷は過去から現在までの、さらには未来への連続性を体現する存在である。第3章ですでにアンナは、沼地の屋敷を初めて見たときに、それが遠い昔からその場所にあり、「何事もなく、これからもいつまでもずっと」存在し続けるという確信を持ち、「憧れに似た気持ちでその屋敷を見つめていた」(26)。アンナの回復された居場所は無論ロンドンのプレストン夫妻宅だが、沼地の屋敷は別荘としてリンゼイ家に所有されることによって、アンナにとって今後とも事情が許せば再訪出来る状態で存在し続けることが確約された。このことの実感もまた、今後の彼女の自分に対する確信や、過去との連続性の実感を支えることになるに違いない。結末の場面で、ワインターメニーに別れを告げて屋敷に戻ったアンナは、こんな暴風雨の日を外にいたのか、と問うリンゼイ夫人に対して、満面の笑みを浮かべて「でももう中にいるわ」と答えている (278)。彼女のこの台詞はもちろん、「屋敷の中にいる」という意味だけでなく、例の「輪」の「中にいる」ということをも、同時に意味している。この直前の場面でアンナがワインターメニーに別れを告げたとき、頭上には海鳥が啼きながら輪を描いて飛び交っているが、その声はアンナの耳にはもはや「ピティー・ミー」とは聞こえていなかった。それは彼女が過去との和解を実現し、過去との連続性を回復し、現在の自分の存在に確信を持っているからに違いない。

註

- (1) Joan G. Robinson, *When Marnie Was There* (London: Collins, 2002). 作品からの引用はこの版の頁数を本文中に () で記す。
- (2) Brian Doyle ed., *The Who's Who of Children's Literature* (London: Hugh Evelyn, 1968), p. 235.
- (3) Humphrey Carpenter, *Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's Literature* (Boston: Houghton Mifflin, 1985), pp. 217-218.
- (4) 1950年代のファンタジーにおけるこの主題については拙著『ファンタジーと歴史的危機——英国児童文学の黄金時代』(彩流社、2003)の第7章から第9章を参照されたい。